開催地名	兵庫県姫路市
開催日時	令和５年８月 29 日（木）　13：30 ～ 15：00
開催場所	姫路防災センター　多目的ホール
語り部	髙津　智子　（岡山県岡山市）
参加者	市役所職員　51 名
開催経緯	近年、姫路市では大規模な被災経験がなく、自治体職員の防災意識の低下や危機感の薄れがみられた為、講演を通じて全庁的な防災意識の高揚に繋げたいと思い開催した。
内容	（１）　平成 30 年７月の豪雨災害について 岡山県は、「晴れの国　岡山」とアピールしてきた。大規模災害の少ない県でもあった。 しかし、平成３０年７月豪雨により、倉敷市真備町は甚大な被害に見舞われた。５年前の７月６日の深夜、真備町では、小田川と支流の川が氾濫し、相次いで決壊、町の３割、最大約５ｍまで浸水した（浸水エリアはハザードマップと同じ）。真備町の人口の約 1 割にあたる 2000 人が逃げ遅れ、自衛隊等に助け出された。町では 51 名が亡くなり、そのうち９割が 65 歳以上の高齢者だった。避難しなかった理由を尋ねたアンケートでは、「これまで災害を経験したことがなかったから」「２階に逃げれば大丈夫だと思ったから」という回答が多かった。安全・安心の思い込みが最大のリスクだと痛感した。 （２）　避難所運営を通じて考えたこと。 〇マニュアルは通用しない（しかし、マニュアルは必要） ・「避難所運営は、本来市の職員の仕事」と言われるが、避難所に、行政担当者は一人かもしれない。（広域で地震が発生すれば…） ・地域の条件・リスクは様々である。 ・発災直後に災害ボランティアは入らない。 ・非常時は平時とつながっている。 〇人を救うのは人 ・人の命や生活を奪う災害に向き合ったときに、どう行動するか ⇒目の前のつらい思いをしている人のために、少しでも安定した環境を提供することができないか、救えないかもしれないけれど、寄り添うことはできるのではないか…。 ・正解はどこにもない中で、できることを、できる人が、できるときにする。 ⇒同時多発的に問題に直面し、判断を求められる状況。目の前に問題が表れたとき、誰が解決するのだろうと考えるのではなく、どうやって解決するかを考える事が大事。 ・動かないと何も進まない「Ｄｏ＆Ｔｈｉｎｋ」 ⇒「考える」と「実際にやってみる」の差は大きい。

	・リーダーとリーダーに協力する人が必要。チームで動くこと（組織）が大事。 ⇒私自身も教職員や支援団体等に助けられ、支えられた。チームの力を実感。 （３）　災害発生・避難所運営 ７月６日の夜、避難者が想定外の多さだったことで、教室も開放せざるを得なかった（学校防災マニュアルは通用しない）。７月７日の早朝に届いた支援食料は、人数分には到底足りなかった。食料の配給に長い列ができ、食べ物がないことがこれほど悲しく心細いことかと思った。断水によりトイレが詰まり始め、プールの水を運ぶ。電話・インターネットが遮断され、自分の携帯電話でしか、情報収集や児童の安否確認ができない状況となった。 教職員の協力により、避難所を安定に向ける。（教職員の勤務時間を６時間にして、二交替制にする）。避難所の学習室で、児童の災害遊びが見られた。被災後の子どもたちの心身の変化等を見逃さないよう、心のケアが大切であることを痛感した。11 日にエアコンが設置され、また、医療チームも到着したことにより、避難所の環境が少し改善。 避難所運営において、チームの力は大きかった。各種支援団体と毎日チームの会を開催し、問題を出し合い、その解決方法を検討し、実行していった。併せて、地域の方との会も行い、物資の配送やトイレ掃除、在宅避難者への連絡等を協力してもらった。 段ボールベッドを避難者や支援団体、教職員と協力して設置したことで、避難者の代表者を各設置場所からに選ぶことができた。それぞれの代表者を男性と女性の２名にしたことは、その後の避難者による自治運営組織（代表者会）においてよかった。様々な場面において、チームで動く成果を実感した。 （４）　「まさか」を「もしも」へ いつ、どれくらいの自然災害が起きるかは想定外、自然災害が起きたらどうなるかは想定内に…。想像力を高めて「もしも」に備えること、災害をイメージし、防災につながる行動を実践してほしい。 ①災害が起こったとき、災害ごとの緊急避難場所や指定避難所がどこにあるか知っていますか？ ②浸水想定区域や土石流警戒区域など、災害の種類ごとにハザードマップで確認できていますか？ ③災害が発生したときにどこに逃げるか家族で話し合っていますか？ ④日頃から防災について、ご近所で話し合う機会はありますか？ 上記の設問に対して、４つ全てできている人は０人。３つは 10 人ほど。２つがほとんどであった。④の問にある、地域での話し合いを進めてほしい。 学校防災マニュアルの実効性を高めるため、避難所の備品の置き場所や備蓄物品の見

	える化、備蓄倉庫の鍵の共有、職員の自宅の災害リスク・ハザードマップの確認、職員の緊急避難場所や連絡先のファイル化などを進めることが重要である。平時に、学校と地域と行政との協議をしてほしい。 （５）　おわりに 　西日本豪雨災害後５年と言う言葉をよく聞いたけれど、今は、「災害後」ではなく、「災害間」「災害前」かもしれない。いつでもどこでも誰にでも災害は起きる。想定外の中で災害に巻き込まれる。改めて想定範囲を広くしてほしい。大丈夫だろうと考えることがリスクマネジメントの最大の敵。リスクを見つけて、リスク対策を実行することが必要。憂いなければ備えなし。非常時は平時とつながっている。 　防災教育は、直ちに成果の出る特効薬ではなく、漢方薬である。子どもたちが社会人となり、例えば、姫路市から出て、東京や四国、九州などで働くようになったときに力を発揮して、自分の命を守り、大切な人の命を守ることができるのではないか。地域ぐるみで防災意識を高める取組が必要。 　避難行動を、「空振り」と考えるのではなく「素振り」の練習と考えて実行すること。災害を自分事としてとらえて、持ち場持ち場で備えてほしい。
開催地より	髙津様にご講演いただき、市職員として避難所運営にどのように関わっていくべきかを考える非常に良い機会となった。髙津様のお話は、実際に避難所運営に携わられて感じたこと等の経験談が豊富で、災害時の現場の状況をイメージしやすい内容でした。実際に受講者からも、経験談や現場の写真を用いた説明で非常に分かりやすかったという声も多かった。 　今後も、このような講演会を通じて、市民や市職員の防災意識の高揚を図っていきたいと感じた。